

栃木県埋蔵文化財センターだより

やまかいどう

特集

縄文時代の衣食住

発掘現場の最新情報!

発掘現場レポート

甲塚古墳

埴輪の大行列

馬型埴輪復元製作

施設紹介

『おやま縄文まつりの広場』

新連載

とちぎ考古学最前線①

～県内最古の竪穴住居の話～

志賀かう子コラム

わたしの愛唱詩から

～「母」 宮沢賢治～

甲塚古墳 埴輪の大行列

甲塚古墳は国分寺町教育委員会で発掘しました。
古墳についての解説及び埴輪の復元の様子を6ページで紹介しています。

No.
37
2004.11

縄文時代の衣食住

旧石器時代から古代(奈良・平安時代)にかけての衣・食・住に関する歴史をシリーズで紹介します。今回は縄文時代の食について紹介します。

縄文時代の「食」

縄文時代は、寒冷な氷河期が終わり、気候が温暖化した時代です。それまでの乾燥した草原に代わって、日本列島に森林が形成されはじめました。この豊かな森にある食料を、狩猟、漁撈、採集といった手段によって手に入れた時代で、本格的な農業はまだ行っていませんでした。

縄文時代に生きた人々が、何を食べていたかを知るためには、遺跡から出土する食べ物の滓を調べます。しかし、日本列島の土はたいがい酸性であるため、有機質の食べ物の滓は、腐ってしまっておりほとんど残りません。ただし、「貝塚」と呼ばれる貝を大量に捨てた遺跡では、貝殻が溶けて土がアルカリ性となり、動物や魚の骨などが残っています。また、「低湿地遺跡」と呼ばれる水に漬かった遺跡では、物を腐らせる酸素がないため、動物や魚の骨のほか、植物などが残っています。これらの遺跡の研究から縄文時代の食料についておおよそのことが判ります。しかし限界もあります。木の芽、山菜、根茎類(イモ類)、キノコなどは、遺跡で残るこ

とはほとんど不可能です。近年、富山県桜町遺跡で山菜のクサソテツ(コゴミ)が出土して話題となりましたが、これなどはごく稀な例です。そこで、遺跡の土に残っている植物の花粉の化石などを調べ、当時の自然環境を復元し、周囲の食べられる動植物を推定する方法があります。これまでの研究で、縄文時代にはフグやキツネノカミソリ(植物)の毒を抜き、渋みの強いトチの実のアクを抜いて食べていたことが判っています。周囲の食べられる動植物はほとんど利用できたと考えられます。

海から遠い栃木県では、貝塚が少なく、縄文時代の食料を知る手掛かりは豊富とはいえません。しかし、寺野東遺跡の低湿地や藤岡神社遺跡から、多くの食べ物の滓が出土したので、これを参考に縄文時代の人々の食べ物を考えてみたいと思います。

狩猟(狩り)

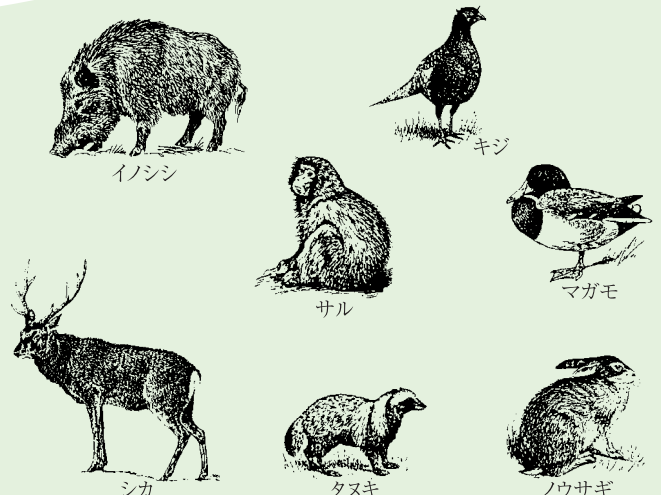
縄文時代の人々が最も多くと獲った動物はシカとイノシシです。肉の量も多く、重要なタンパク源であったと思われます。縄文時代の遺跡からは石鏃(石のやじり)が多く出土しますので、主に弓矢を使ったと思われます。狩のパートナーとしてイヌも飼っていました。サルやタヌキも好んで食べていたようです。この他ウサギ、アナグマや鳥類も獲っていました。寺野東遺跡では絶滅したオオヤマネコの骨が出土しています。



石鏃(野沢遺跡)



縄文犬の頭骨(藤岡神社遺跡)



漁撈

狩は当たりはずれが多く、しかも主に冬の時期に行われます。狩の獲物は、食べ物の中であまり大きな比重を占めていたとは思われません。それと比べて漁撈は、魚の種類を組み合わせれば一年を通じて安定して獲物を得ることができます。藤岡神社遺跡からは、コイ、フナ、ギバチ、ウナギ、ハゼ、スズキの骨が出土しました。縄文時代の前半期は、海岸線が今より内陸に入り込んでいました。栃木県南部の河川では、潮の影響があったと思われます。ハゼ、スズキといった海と川を行き来する魚も獲れたと思われまます。春のウグイ、サクラマス、秋のサケなど産卵や遡上のため季節によって大量に獲れる魚があり、これらを巧みに利用していたことが想像できます。縄文時代の遺跡からは、石や土で作った錘が出土します。網を使った魚獲りも行われていたようです。



石錘・土錘(藤岡神社遺跡)



採集

縄文時代は獣や魚を多く食べていたと考えがちですが、主な食料は植物でした。特にクリ、クルミ、ドングリ、トチなどの木の実が重要であったことが判っています。ドングリ類は水にさらしたり、土器で煮てアクを抜きます。トチは更に灰を加えて煮ます。これらを粉にするための石皿や磨石といった道具が、縄文時代の遺跡からは数多く出土します。その他、デンプン質の根茎類(ヤマイモ、ユリ根、カタクリの根、クズの根など)やビタミン類を含む、木の芽、山菜類を食べたと思われまます。前にも述べたように、これらが遺跡から発見されることはほとんどありません。



石皿・磨石(藤岡神社遺跡)



栃木県の縄文時代の食べ物

栃木県の平野部の縄文時代中期を例にとり、どの季節にどんな食べ物を獲っていたかを想像し、図にしてみました。日本列島は春夏秋冬の四季の区別がはっきりしていて、季節ごとに獲れる動植物が変わってきます。これを巧みに組合せ、縄文時代の人々は豊かな食生活を送っていたようです。

調理

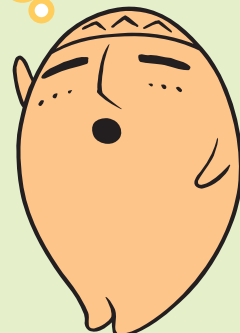
縄文時代の食べ物を知ることは非常に難しいのですが、その食べ方を復元することはもっと難しいことです。

獣や魚は、生か、焼くか、あるいは煮(塩茹でし)て食べたことが想像できます。パンやクッキーのようなものが焼け焦げて遺跡から出土することが稀にあります。木の实類はこのようにして食べたことが想像できます。ただし、これは狩の携帯食とする考え方もあります。木の实類の粉を、お粥あるいは水団のようにして食べていたかもしれません。

藤岡神社遺跡写真提供: 藤岡町教育委員会

2004年 発掘現場 レポート

遺跡には
ロマンがいっぱい
つまってます



当センターが発掘調査している現場から、最新の情報をご紹介します。
発掘現場を見かけたらどうぞ声を掛けてください。

1 きたはらいせき 北原遺跡 (南那須町)

北原遺跡は、南那須町高瀬字北原地内にある、地形的には丘陵地帯を流れる荒川が、大きく屈折したところの左岸にある緩やかな南西向きの斜面にあります。

9月現在で発見されている遺構は、竪穴住居跡140軒以上、堀立柱建物跡9棟、方形竪穴遺構6基、土坑488基、溝11条などです。時代的には古墳時代前期から奈良・平安時代、鎌倉・室町時代にかけての集落遺跡で、最も多い遺構は、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡です。

写真は、北原遺跡で最大規模の古墳時代後期の竪穴住居跡です。12人の作業員がいるので、ある程度の大きさはわかると思いますが、これは一辺の長さが10m程あります。これを畳に換算すると、60畳以上になります。この広さをご自分の部屋と比べてみてください。この家には、どんな人が住んでいたのでしょうか。このムラの有力者なのでしょうか。それは、まだ分かりません。その答えを求め、調査員と作業員たちは、極暑でも、極寒でも、発掘を続けていきます。



古墳時代後期の竪穴住居跡(南から)

2 しもがみいせき 下上遺跡 (宇都宮市)

鬼怒川の東を流れる江川の東岸に位置する下上遺跡は、縄文時代後期(約4000年前)の集落跡として知られていました。今回の調査は、県営畑地帯総合土地改良事業に関わる農道の敷設工事に伴う発掘調査で、遺跡と推定される範囲の東端部分と北端部分の2箇所を発掘することとなりました。現在は東端の発掘調査を進めており、長さ270m・幅約6mの調査区内に、大小含めて270基を越える土坑を確認しました。多くは、円筒状で径約1.2m・深さ約1.0m程の大きさの土坑で、土器などの遺物の出土が少ないことが特徴です。この他、縄文時代草創期(約12000年前)以前に遡ると考えられる土坑を8基確認しました。何れも楕円形で、長さ約60cm~120cm・幅約60cm前後・深さ30cm前後の土坑です。また「真岡街道」と呼ばれていた道路跡も確認しました。「真岡街道」は、最近まで使われていた道ですが、今回の調査によって、江戸時代には「道」として機能していたことや道幅が現代の道幅の倍近い3m程あったことなどが明らかになりました。



縄文時代後期の土坑群(北から)

3

すな た い せ き

砂田遺跡25区 (宇都宮市)

砂田遺跡は北関東自動車道の宇都宮・上三川インターの北、宇都宮外環状道路の南に位置しています。この遺跡は平成8年より断続的に調査されており、今までに古墳時代中期から奈良・平安時代の集落や中近世の溝などが確認されています。調査した住居跡を全部合わせると300軒以上です。今回の調査は26区、東谷・中島地区の開発地域内で、宇都宮外環状道路の拡幅に伴う調査が行われました。竪穴住居跡2軒、溝6条、土坑5基、ピット30基の他、井戸1基が確認されました。井戸は一辺約2.5mの方形で、約3mの深さがあります。重機で半分にたち割ったところ、井戸の底近くから須恵器の坏が2枚重なって出土し、その下からは「長田」という墨書のある須恵器の坏や内面が黒い土師器の坏が出土しています。これらの土器は、使わなくなった井戸を埋める時に、何らかのお祀りで入れたものかもしれません。また、土器の下から、綴じ目に桜の皮を使った桶の底板や、ウガオの破片も出土しています。土器から、9世紀中葉、あるいはそれ以前に使用された井戸であることが分かりました。



井戸から出土した土器群

4

ぎ おんじょうかん れん い せ き

祇園城関連遺跡 (小山市)

結城方面から小山市街地に向かって結城街道(県道小山・結城線)を走ると、J R線を越える立体交差橋を西におりたところで県道喜沢栗宮線とT字に交差します。この部分を国道4号まで延長するため、道路工事に先だって発掘調査を行うことになりました。その結果、溝跡6条(うち1条は大溝跡)、井戸跡8基、地下式坑2基、方形竪穴遺構2基、土坑・小土坑約300基が発見されました。特に、大溝跡は推定の幅が約8m、深さが約2.5m以上もあり、15世紀後半頃の内耳土器が出土しています。今回調査区は、国指定史跡の祇園城跡(城山公園)から東に約350mほど離れた場所で、城跡の東の限界付近と考えられています。したがって、今回見つかった大溝跡は城の東端の区画溝にあたるものかもしれません。今後の整理・報告作業の中で検討していきたいと思っています。ちなみに祇園城は、小山氏や、後北条氏、徳川家の家臣・本多氏などが北関東支配の拠点としたお城で、14世紀後半～17世紀前半に存続していました。



遺跡全景(後方の緑地は城山公園・東上空から)

5

かんばたけ い せ き

神畑遺跡 (足利市)

神畑遺跡は北関東横断自動車道路建設に伴う事前調査とし、今年の2月に試掘調査、3月以降より本格的な発掘調査を実施しています。これまで神畑遺跡は、足利市教育委員会や当センターによる数回の調査によって、縄文時代前期から平安時代までの複合遺跡であること、また極めて広範囲におよぶ遺跡であることが判明しています。今回の調査は、発掘調査区が遺跡内の低地部分にかかることから、平安時代の水田跡の発見が期待されています。この水田跡の発見には、現在噴煙を上げて、小規模な爆発を繰り返している浅間山が大きく関係しています。浅間山は天明3年の大噴火(江戸時代1783年)が有名ですが、平安時代の天仁元年(1108年)にも大きな爆発がありました。神畑遺跡では、その時の火山灰が最大で4cmほどの厚さで堆積していて、当時の水田をそのまま覆っていると思われるからです。



調査風景(南東から)

甲塚古墳 埴輪の大行列

国分寺町教育委員会では、平成16年5月から7月にかけて下野国分寺跡に隣接する甲塚古墳の調査を行いました。今回の調査は、1987年に県内の古墳研究者の研究で存在が指摘されていた埴輪の配置とその位置を明らかにすることを目的として調査を行いました。(帆立貝式と呼ばれる前方後円墳)

その結果、基壇と呼ばれる平坦面のほぼ中央に埴輪列が巡っていることを確認しました。後円部は円筒埴輪が全周し、前方部西側のくびれ部から前方部前端に向かって形象埴輪が並べられていることを確認しました。

形象埴輪列は後方から馬形埴輪4頭、さらにその4頭の傍らには馬子と推測される人物埴輪が配置され、その前方にも人物埴輪が20体ほど出土しました。また、前方部の西側では土器が300個ほどまとまって出土しました。

下の写真の真ん中に石があるのがわかるだろうか？その石の上下にある4本の筒状の埴輪が馬の足だよ。



埴輪出土写真(一番手前が先頭・南から)

町や村のお手伝い

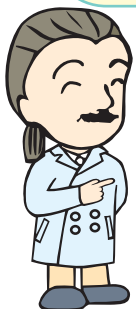
以前(やまかいどう31・32号)保存処理室のお仕事をいくつかお伝えしましたが、もう一つ大事な仕事があります。

それは、皆さんの住んでいる町や村の持っている文化財が壊れそうに、また壊れた時にその修理をお手伝いする仕事です。もちろん壊れないように気を付けているのですが、どんな理由で壊れるかわかりません。地震で倒れるとか、建物だと台風で壊れるということもありました。

ただし、ここは埋蔵文化財センター、壊れた文化財だけではなく、新しい文化財、そう発掘で見つかった埋蔵文化財の保存処理・修理復元もお手伝いしています。

今回は表紙になっている国分寺町・甲塚古墳出土の馬型埴輪の復元をお伝えしようと思います。復元途中ですので全体の形がわかりにくいとは思いますが、よ〜く見て、読んでください。

まあなんと
たてがみの
大きいこと



頭部と首・胴部左側(鼻先は復元)



馬の4本の足(左側が前足で右後足のみ接合)

馬型埴輪復元製作

まず、復元するに当たって破片の強化処理(やまかいどう35号の人物埴輪の時と同じ)を行います。強化処理が終わった後、接合(セメダイン等で接着)して破片が無いところを復元していきます。やはり復元樹脂は、人物埴輪と同じ収縮・変形に強い2種類のエポキシ樹脂を使います。

ただし、今回は復元に際して大きな問題が2つ見つかりました。4本の足のうち右後足1本しか胴体に接合しません。

また、胴体は腹部と左脇、背中が着くのですが、右脇は宙に浮いた状態で、なおかつお尻はありませんでした。

唯一形状がわかるのが顔と首の部分。通常は足、腹部、脇、背中、首と順番に接合していけるのですが、今回は無理！首を綺麗に復元してから胴部(尻部はまだ)を作っていく、右後足の長さに合わせて復元した3本の足を胴部の下において接合・復元、内側から強化して最後に尻部を作ります。

言葉だけではわかりにくいのでこの様子を写真に記録しておき、機会があれば紹介したいと思います。

完成するのはまだまだ先の予定です。全体ができて、細かい飾りまで復元できれば立派な馬になると思います。完成したら国分寺町で展示すると思いますので、その時は皆さん見学に来てください。

そして、実は市町村のお手伝いでは学校に行ったこともあります。高校と小学校です。もしかしたらどこかでお会いできるかもしれません。その時を楽しみにしています。

10月30日
オープン!

国指定史跡 寺野東遺跡

おやま縄文まつりの広場

施設
紹介

寺野東遺跡は、小山市の東端の絹地区にあり、東に筑波山、北に日光連山や那須連山を望むことのできる台地の東側縁辺部に位置しています。

この地が、小山東部工業団地の事業地区に選定されたため、平成2年から栃木県埋蔵文化財センターと小山市教育委員会が、協力して調査を行いました。

調査の結果、遺跡には、旧石器時代から平安時代までのムラや墓地がつくられていたことがわかりました。なかでも、縄文時代の遺構である環状盛土遺構や水場遺構は、その歴史的価値が高く評価され、平成7年11月8日に国史跡に指定されました。

史跡指定地22,325m²には、環状盛土遺構・石敷台状遺構・水場遺構が復元されました。公園入場口には史跡からの景観を妨げないように、屋根の低い平屋の「ガイダンス施設」が建っています。中は、遺跡を解説する展示室で、環状盛土遺構のはぎ取り断面や水場遺構の出土遺物、木組遺構の復元模型などを展示しています。

【所在地】栃木県小山市大字梁2075-4 Tel.0285-49-1151

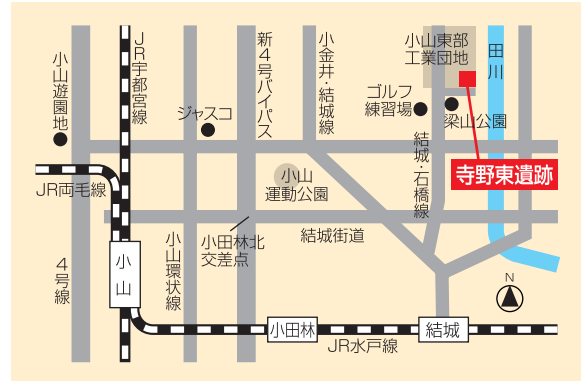
【開園時間】9:00～16:30

【休館日】月曜日(祝日の場合は翌日)

祝日の翌日(土・日の場合は除く)

年末年始(12/28～1/4)

【入館料】無料



とちぎ考古学最前線①

～県内最古の竪穴住居の話～

「とちぎ考古学最前線」と仰々しいネーミングになってしまった。当センターの調査成果を、平易に説明することを目的にした新コーナー。埋蔵文化財の重要性を少しでも県民に理解していただければと願って、コーナーを新設した次第である。

1回目は宇都宮北道路に伴い発掘調査された野沢遺跡(宇都宮市野沢町)に決めていた。それは「ムレからムラへ」という人類史にとって画期的な事件の解明に、有力な手がかりを得たからである。問題の竪穴住居は、調査区内から3軒発見された。出土した土器に付着した炭化物の年代測定から、住居は縄文時代草創期の11,700～11,800年前と判明。県内では最古、全国的にも最古級。大きな話題になった。住居をやや詳しくみていこう。3軒の住居はほぼ円形で、4m以下と小規模。住居を埋めた土が特徴的で、七本桜軽石層と今市軽石層と呼ばれる男体山噴火の火山灰。まだ黒色土が充分形成されない時期に住居は廃棄されたと推定され、住居の古さを間接的に証

明する。さらに、住居内からは土器と多数の石器や剥片が出土している。また、4号住居の住居中央から打ち込まれた柱そのものが発見された。コナラ属の材の先端を尖らせたもので、この柱を中心に屋根を葺いた(一本主柱伏屋式)のである。

縄文時代草創期に野沢遺跡から複数の竪穴住居が発見された意味は、定住生活の成立という視点から重要であることを説明しよう。旧石器時代から縄文時代への移行は、狩猟から狩猟・採集社会への転換で、それに伴い石器が変化し、土器が出現する。その移行は、移動生活から定住生活への変化でもある。狩猟を生業とする移動生活は厳しいもの。老いと共に足が衰え、ムレから離れ、死んでいく。定住生活は、そんな悲劇を少しずつ解消することになる。そして、男の屈強さや勇敢さのみが賛美される社会から、年寄りの知恵や女性の勤勉さや優しさが重視される社会へと変化するのである。

(調査部長 橋本 澄朗)

宮澤賢治の文語体で書かれた一篇である。

眼をつむり、声を出してこの詩を誦（そら）するとき、賢治の視線に私の中で彷彿とする映像が重なるのをおぼえ、現実には知らない情景ながら、田の畦（あぜ）を小さな点景のように過ぎゆく母と子の様子や母の胸のうちや、四方をとり囲む山にかかった雲の様や、空気の澄みわたる感触があざやかに見えて来るのだ。それはうつくしい絵であるのに、かなしみをともなって胸に迫ってくる。

父祖の地としての岩手を、しかも寒冷地ゆえにとりわけ貧しかったその北の地の実態を、いささか知っている私は昭和十年の生まれ、その私が語っておかなければ、あるいはこの詩はひとびとの理解から遠のいていくのではないかと、との思いが私の中にあり続けた。

雪袴（ゆきばかま）とはもんぺである。黒くうがちとは土まみれに汚れた貧しさの表現にちがいない。粗末なもんぺをはいて、ざん切り頭の幼な児がまくわ瓜（かぼ）であろう、今どきの甘いそれとは異なる瓜を、むさぼり喰みつつ歩いてくる。彼方四方の山々には渦巻くように白雲が悠然とたな引いているのだ。歩いている子は一人ではなかった。母が傍（かたわ）らにあった。

「その身こそ」、自分だってひもじいのだもの、喉から手が出るほどに瓜が欲しいにちがいない、まだ幼い母なのだもの。だが、わが子の瓜を取り上げはしない。彼女は、母なのだもの。

空腹（いへ）を癒すための手すさびか、幼い母は、田の道の辺の紅い萱（かや）の穂を摘んで東にして子と並んでとぼとぼ過ぎて行くのだった。

母

宮澤賢治

雪袴黒くうがちし
風澄めるよもの山はに
その身こそ瓜も欲りせん
手すさびに紅き萱穂を

うなるの子瓜喰みくれば
うずまくや秋のしらくも
齢弱き母にしあれば
つみつどへ野をよぎるなけれ



その光景の一部始終を見つめる賢治のまなざしが、こちら側にある。

そのことを見失ってはならない詩ではないか、と私には思われるのだ。

北の地の夏は短い。その短い夏が冷夏や雨のない年となれば稲も野菜も実らない。

貧しく子沢山の農民たちは供米も借地料の支払いも叶わない。大家族が生きていくためには、身を切る思いで娘を売ることが余儀なしとした、かなしい時代だった。この母はまだしも、口減らしのために年端もゆかぬ十三、四歳で嫁に出され、婚家先は労働力確保に欠くべからざるものとして嫁を迎える、といった状況だったろう。

詩人は、題を「母」とうたった。なんとという正鵠（せいこく）（注1）を射た感性、かなしみを包容するなんとした慈しみ！ その思いが私にひたひたと打ち寄せてくる。「うずまくや秋のしらくも」とは、まさに花巻周辺の山を仰いで実感する雲の形状なのである。

天才 宮澤賢治 とは、霊峰・早池峰山を抱き、あの美しい雄壮静謐（せいひつ）（注2）、大きな空に白雲を泳がせる北辺の地花巻を置いては他に考えられない、あの地に神が蒔かれた珠玉の一粒の種ではなかったか、私にはそう思われてくるのだ。

（注1）正鵠…一番大切なねらい所。（注2）静謐…静かで安らかなこと。

○今号より、当財団顧問 志賀かう子執筆による「わたしの愛唱詩から」がスタートしました。次号も、ぜひお楽しみに。



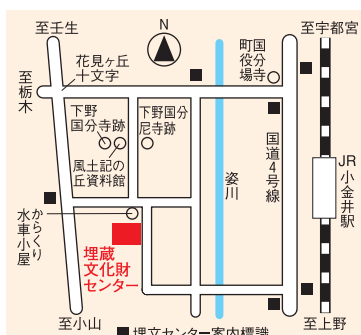
〈志賀かう子プロフィール〉

（財）とちぎ生涯学習文化財団企画顧問。随筆家。日本女子大学卒業。「祖母、わたしの明治」で昭和五十八年日本エッセイスト・クラブ賞受賞。（社）深沢紅子野の花美術館前館長。宇都宮市に生まれ永住し、各種の文化活動に貢献している。

編集後記

朝晩の冷え込みとともに、秋の深まりが感じられるようになりました。今年の夏は記録的な猛暑で、発掘現場では連日の暑さにもめげず、調査が進められました。そんな発掘現場の最新情報を、発掘現場レポートでご紹介します。また、今回からスタートした新コーナーもよろしくご愛読ください。

発行 栃木県教育委員会
宇都宮市埴田1-1-20 TEL. 028(623)3425
財団法人とちぎ生涯学習文化財団
宇都宮市本町1-8 TEL. 028(643)1011
編集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団
埋蔵文化財センター
〒329-0416 栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙474
TEL. 0285(44)8441(代) FAX. 0285(44)8445
E-mail webmaster@maibun.or.jp
URL http://www.maibun.or.jp/
印刷 ヤマゼンコミュニケーションズ(株)



《埋蔵文化財センターへのご案内》

- JR小金井駅から
約4km、車で約10分
- 東武壬生駅から
約6km、車で約15分
- 東武栃木駅から
約9km、車で約20分